

## (5) 本研究における具体的な手立て

VTSの理論と生徒への実態調査の結果から、対話活動の必要性と生徒の生活経験を掘り起こすことで鑑賞の学習が深まると考え、次のア、イのような手立てを取り入れました。

### ア VTSの理論を基にした対話活動

#### (ア) VTSの活用方法

3つの発問をして生徒が感じたことを明らかにしていきます。説明をし過ぎないことが大切です。また、生徒の意見に対し、表情やうなずきで肯定しつつ、そう感じた根拠を探させることが重要だと考えます。提示する作品は生徒の発達の段階に応じて選ぶ必要があります。

#### (イ) VTSの理論と対話活動を取り入れた鑑賞

VTSの3つの発問から、生徒が自分自身に自問自答する鑑賞ができるようにし、生徒同士が対話することで、お互いの考えを共有し、批評し合うことができるようにします。(以下の①②③)

- ① 美術作品の感じ方を、生徒が自分に問う形にする。
  - ② 生徒同士で対話を行い、感じ方の根拠を考え、批評し合う。
  - ③ 美術作品に再び向き合うことで、生徒が感じ方を深める。
- \*①～③の中で、教師は美術作品の知識、歴史的価値については触れない。

鑑賞の授業で教師の「なぜ」という問いに、生徒は「なんで、そう思ったのか」、「なんで、そう感じたのか」を自分に問い続けることとなります。そうすることで、作品の解釈や知識を得るのではなく、自分の問いが深まることとなります。この自問自答を繰り返す中で、鑑賞の能力が養われていき、対話を用いることで生徒の思考力や対話力が向上し論理的思考も身に付いていくと考えます。また、対話を取り入れた鑑賞の授業では、生徒が美術作品からどう感じ、どの部分を見てそう感じたのかを明らかにしていきます。さらに、経験、知識、《共通事項》と結び付けて、自分の思いや考えを発表し合うことで、自分の思いや考えの根拠が分かり、鑑賞活動が深まると考えます。

### イ 生徒の生活経験を掘り起こす発問

V・ローウェンフェルドは、子供を美術作品に親しませることについて、以下のように述べています。<sup>(1)</sup>

子供に親しませるためには、何よりもまず、美術家とその主題とどのような関係にあったか、その美術家の気持ちに、子供をできるだけ同一化させてやらねばならない。……われわれは美術家の「意図」に自分を同一化させることによって、その作品を、いっそう深く理解したり、鑑賞したりできるのである。

V・ローウェンフェルド 『美術における人間形成』 昭和38年 p.67より引用

作品を深く理解したり鑑賞したりするためには美術家の気持ちに生徒を同一化させることが必要であることが分かります。事前の実態調査の結果の分析から、作品を自分の生活体験(日常生活)と結び付けてみている生徒を多く見ることができました。生徒を美術家の気持ちに同一化させるためには、生徒の身近な生活経験を結び付けることが大切であると考えます。そのために、作品を掲示する前に、日常経験と結び付けやすい発問をしてから鑑賞活動を行わせませす。

## 《引用文献》

- (1) V・ローウェンフェルド 『美術による人間形成』 昭和38年 p.67